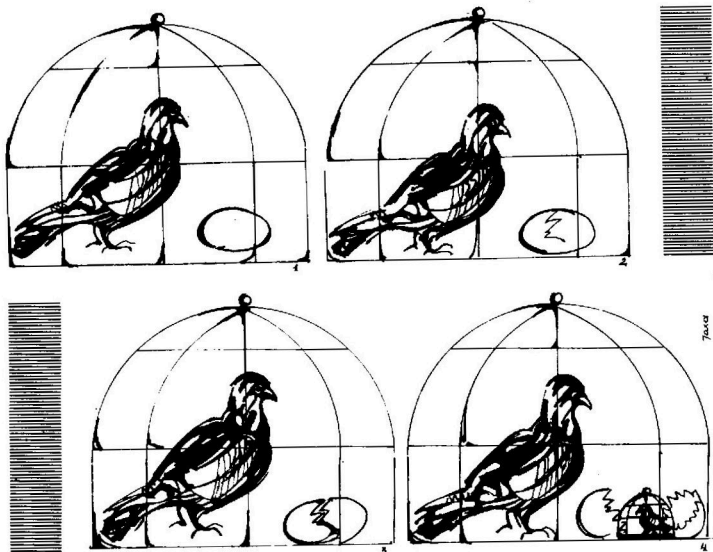


ポーランド月報

第20号

1983年11月5日
(毎月1回5日発行)

400円



特集・ポーランド文化の一断面

戦後ポーランドの文化を語る……………2

コワコフスキ、ミウォシュ両氏に聞く

いかにして保守的・自由主義的・
社会主義者となるか……………8

L・コワコフスキ

夏の列車旅行……………10

M・ノヴァコフスキ

不当な映画審査に抗議する……………12

A・ワイダ

戒厳令下の地下出版事情……………15

独立出版社「クロング」インタビュー

「連帯」が成し遂げたもの……………18

——ハーバード大学への書簡

L・ワレサ

ワレサ委員長にノーベル平和賞……………22

「連帯」暫定調整局文書……………23

ポーランド日誌……………26

戦後ポーランドの文化を語る：回顧と展望

コワコフスキ、ミウオシュ両氏に聞く

聞き手 工藤 幸雄

Interview with L.Kořakowski and C.Miřosz
by Yukio Kudo, 1983.9.25, Tokyo

〔編集部注〕本年9月、現代ポーランドの知性を代表する2人のポーランド人がほぼ同時に来日した。哲学者のL・コワコフスキ氏と詩人のC・ミウオシュ氏である。コワコフスキ氏は、9月12～15日、軽井沢で開催された国際シンポジウム、「20世紀とは何だったのか」（国際交流基金主催）の16人のパネリストの1人として招かれ、一方ミウオシュ氏は、9月13、14の両日大阪で開かれた国際シンポジウム、「21世紀への英知——ノーベル賞受賞者は提唱する（大阪青年会議所、毎日新聞社主催）」に5人の報告者の1人として招待されたものである。この機会に工藤幸雄氏を交えて行われた討論の要旨を紹介する。『月報』掲載を快諾された両氏に心からお礼申し上げます。なお、文責はすべて編集部にある。コワコフスキ、レシュク Kořakowski, Leszek 1927年生れ。ポーランドの哲学者。1958年からワルシャワ大学教授。スターリン死後の1954年以来、党内修正主義派の旗手。56年事件10周年にあたる1966年、ワルシャワ大学で行ったこの10年間の改革の失敗を総括する講演のため、党から除名、68年解職。イギリスに渡り、オックスフォード大学教授。KORメンバーの1人。主著『歴史と責任——知識人とマルクス主義』（勁草書房）ほか。ミウオシュ、チェスワフ Miřosz, Czesław 1911年、リトアニア生れ。ポーランドの詩人、随筆家。1980年ノーベル文学賞受賞。第2次大戦中AK〔国内軍〕に加わり地下活動。戦後外交官としてワシントンとパリに（46～50年）。スターリン体制に絶望してフランスへ亡命（51年）、のちアメリカへ渡り（60年）、以後カリフォルニア大学教授。「連帯」の精神的支柱の1人で、グダンスクの70年事件記念碑の文は彼による。代表作『まひるの明かり』ほか。

終戦前後の文学者組合

工藤 戦後のポーランド文化について話をうかがいたい。私の知るかぎりお2人ともポーランド文学者組合に在籍しておられる。

コワコフスキ 私は文学者組合に入っていたがチェスワフ〔ミウオシュ〕はちがうのでは？

ミウオシュ そんなことはない。1981年にポーランドに行ったとき、文学者組合のシチェバンスキ会長が会員証をくれて、「あなたはずっと前から文学者組合員でした。ただ書類が紛失してしまっているのですが……」と言っていた（笑）。しかし文学者組合は解放されてしまったから、われわれはもう自分の意志で組合から出ようとしても出

られない、ずっと組合員のままでいることになるだろう。

工藤 文学者組合は戦後すぐの時期は体制寄りまたはソ連寄りという印象が強い。その後しだいに性格が変わってきたようだ。

コワコフスキ 文学者組合は1956年以降は絶えず体制の目の上のたんこぶだった。それ以来、いわゆる共産主義的な意味で「健康」な組織になったことは一度もない。

ミウオシュ 私は戦争直後の文学者組合を覚えている。私がクラブにいた頃で、クラブニチャ通りに支部があった。私はその第1回目の会合に出席した。1949年までは「作家労働組合」という戦前の名前だった。戦争中は組合活動は凍結されて

いたが、フォクサル通りの組合食堂に作家たちがよく集まり、また共済活動も活発に行われていた。戦争中にしか表面に出てこない種類の人間というものがある。忘れられないのはジグラルスキ氏で、新聞記者だったと思うが、戦前は無名だったが戦時中、金融活動などの面で積極的に活動した。ワルシャワ市の金庫から作家たちに融資できるようにしたのは彼だ。この金を借りる時には、誰も返すことは考えていなかった。というのも、ともかく戦争がどう終るか誰にもわからなかったからだ。白状するが、私はバカなことをした。借りた金を戦後全部返してしまったのだ。地下で「作家の夕べ」といった催しも盛んだつたし、もちろん作家本来の仕事も進められていた。戦後私はクラブで組合幹事会を党員たちが乗っ取る過程をこの目で見た。党側を立てて乗っ取り作戦を最も積極的に進めたのがカジミエシュ・ブランデイスだ〔今は亡命作家となっている〕（笑）。私は当時反体制側にいた。

多くの作家が党員に

コワコフスキ 戦争直後、多くの作家が党員だったことを忘れてはならない。それもPPR（ポーランド労働者党〔共産党〕）の党員だった。たとえばヤストルン、アンジェイエフスキ、コット、ヴァジク。短期間だったがナウコフスカも入っていたし、マリアンとカジミエシュのブランデイス兄弟も。

ミウオシュ アンジェイエフスキがPPRとは聞いていない。少なくとも45年には絶対に入っていないかった。

コワコフスキ 48年〔PPRとPPS（ポーランド社会党）が合同してポーランド統一労働者党が成立した年〕以前はまちがいがなくPPRにいた。その他若い作家連中では、ヴィルブシャ、ヴォロシルスキ、ポヘンスキ、ポミアノフスキ、私。短期間だがアドルフ・ルドニツキも。彼は党費を納めるのがいやですぐやめた（笑）。おわりのようにポーランド文学の大御所が全部PPRに入っていたし、また入っていないけれども大部分の作家が体制に同調していた。たとえばトゥービン、スウォムニスキ、ガウチンスキ、イレナ・クシヴィツカ、それからある程度までここにいるミウオシュもそうだ。だから、「ポーランドの共産主義は知

識人の支持を全く得られなかった」とは言えないし、むしろ正反対だ。

ミウオシュ そうだ。それに運命論的なあきらめの境地で体制に同調する作家たちもいた。マリア・ドンプロフスカやスタニスワフ・ステンポフスキなどだ。ステンポフスキは45年にもう、「この汚物は世界中にまんえんするにちがいない」と私に言っていた。ドンプロフスカはある程度体制に反抗する心がまえを見せていた。

工藤 日本でも戦後多くの作家が共産党に入ったが、だんだんやめていった。

コワコフスキ これもひとつの社会的過程である。逆にイヴァシキエヴィチはずっと非党員だったが体制には忠実だった。

ミウオシュ そう、イヴァシキエヴィチが戦後最初に書いた詩は、ウッチの町を描き、赤と白の旗〔ポーランド国旗〕が云々という内容だった。「ピエルト大統領への手紙」という詩も書いている。

工藤 その原因は何だったのか。冷戦？ それとも戦後の希望に満ちたポーランドの建設？

コワコフスキ この時期、思想というものが非常に大きな役割を果たしたと思う。とくに戦前からの知識人は全体として左に傾いていたと言える。新しい体制ができた時、ほとんどの人がこれは昔からのラディカルな伝統をもった社会主義運動の延長だと考えた。社会主義体制に皆が同調した大きな原因は戦前の複雑に絡みあった政治の現実に対する反感だと思う。

第2次大戦前のポーランド

工藤 戦前のポーランドにはファシズムはあったのか。

コワコフスキ 戦前のポーランドがファシヨ的だったとは言えないだろう。いくつもの合法的政党があり、中にはPPSのように巨大な力をもつものもあった。ポーランド共産党も非合法ながら1920年代から活動していて、それが解散させられたのも、ポーランドの戦前の体制によってではなく、コミンテルンによってだった。しかし、ピウスツキ元帥が亡くなっていわゆる「大佐政権」になった時、左翼的知識人が大いに不安を感じ、嫌悪感を持ったのは事実だ。ミウオシュもどこかで当時の政治的雰囲気についてふれ、「われわれは戦前のポーランドを惜しいと思っていない」と書いて



ミウォシュ

……「連帯」にもいろいろな考えの人が入っていた。なにしろ1千万の組合員がいたのだから。そこには国民が歴史的に持っていた対立がそのまま受け継がれている。

いる。何に嫌悪感を抱いたかといえば、ますますひどくなる愚鈍さ、反ユダヤ主義、影響力を強める過激な右翼に対する政権の無為……。一般的に言えば、バカバカしい政治だと竹が感じていた。戦後、知識人たちが社会主義支持の行動をとったのもこの影響が大きかったと思う。

工藤 日本の場合、敗戦が民主主義をもたらしたが、ポーランドには戦前も男女同権などある程度の民主主義があった。強い労働組合もあって、労働者は有給休暇の権利を持っていた。

コワコフスキ ポーランドの戦前の社会福祉制度や憲法は非常に進歩的だった。男女同権は完全に守られていた（フランスが男女同権になったのは戦後のことだし、スイスなどつい最近のはずだ）。国全体は貧しく、とくに農民の状態はひどかったが、法的制度は非常によかった。検閲はたしかにあったが、戦後とはちがい事後検閲で、印刷されたものは没収されたが、ものを書くこと自体は禁じられていなかった。時々白いスペースのある新聞などが出っていたが、戦後の検閲と比べれば作家にとって豪勢なものだった。

社会党と民族派の歴史的対立

ミウォシュ ポーランド問題の理解には19世紀末のポーランドにおけるある対立を理解しなければならないと思う。すなわちPPSと民族連盟Liga Narodowaの対立のことだ。この対立が第1次大戦以降も続いた。ポーランドの初代大統領は民族派（民族連盟の流れをくむ）の男に暗殺された。

PPSには色々な人がいて、社会主義者のほか、少数民族の代表者、自由主義者、フリーメーソンその他がいた。ピウスツキ元帥のクーデターを歓迎したのは彼らだった。民族派は特にピウスツキ死後活発となり、たとえば極右のボレスワフ・ピアセツキ（現在のPAX〔戦後体制との協力を旗印とするカトリック勢力の一部〕の親王）は1937年にクーデター計画さえもっていた。結局、1939年、つまり第2次大戦前夜のポーランドを特徴づけるとすれば、非常に強い排他的民族主義ということになる。それ以来、民族naródという言葉は特定の思想ないし観念を持つ一派の独占物となった。だから私はこの言葉が嫌いである。ところでこの対立が今でも存在しているのは間違いない。たとえば、民族派にいわせればKORはトロツキストの陰謀である。

コワコフスキ フリーメーソンとユダヤの陰謀という説もある（笑）。

ミウォシュ 民族派で今も西側でジャーナリストをしている男に言わせれば、「KORの目的は権力を奪い、血なまぐさいトロツキスト的テロを行うことにあった」という。「連帯」にもいろいろな考えの人が入っていた。なにしろ1千万の組合員がいたのだから。そこには国民が歴史的に持っていた対立がそのまま受け継がれている。その中で民族派が相当羽根を伸ばしていたのは私もよく知っている。たとえばこの間ある本で読んだのだが、リトアニア人が「連帯」に対して非常に冷たかった。その理由は、「連帯」の中に民族主義者がお

コワコフスキ

……多くの知識人にとって共産主義は18世紀啓蒙主義の延長であり、左翼合理主義であった。それが多くの知識人が共産主義体制に合理性を認めた根拠でもあった。しかし現在はこのような共産主義観があったという痕跡すら残っていない。



り、「ヴィルノ [リトアニアの首都] はポーランドのものだ」と言ったりしたことにあつた。コワコフスキ「連帯」内には原則派と現実派のふたつの大きな流れがあり、原則派は戦前の民族主義的伝統を受け継いでおり、現実派は戦前のP P Sの伝統に従い柔軟な考えをもっていたと聞いている。知識人の問題に戻るが、戦前、作家たちは大部分P P Sに近い考えを持っていた。民族主義的な考えの作家は非常に少なかった。

カトリックとユダヤ人の問題

ミウォシュ そこから戦前のポーランドにおける知識人と教会の対立が生まれた。ミフニクが書いている（『教会・左翼・対話』）ように、当時、教会は右翼のとりでと言われていた。親カトリックの作家はほとんどおらず、作家としてカトリックに親近感を示すのは非常に度胸がいった。コワコフスキ それはおもしろい現象だ。当時も全ポーランドがカトリックだったのはまちがいないのだから。本にも書いたことがあるが、ポーランドのカトリック教会は17世紀から非常に硬直化し、貴族社会を基盤としてあらゆる改革に抵抗、外の動きに対応する能力がなかった。しかしだからこそ、つまり硬直化し、伝統を重んじ、外からの影響を受けなかったために、三国分割時代にあれほど大きな動きができた。すなわち教会は、ポーランドのあらゆる価値観の貯水池となったわけだ。サルトルも同じように言っている。ミウォシュ マリア・ドンプロフスカに言わせれ

ば、17世紀の“大洪水” [スウェーデンによる侵略]の時にポーランドが占領されなかったのもカトリック教会があつたためだ。ポーランドの東にはウクライナ、白ロシア、リトアニアといった非常に大きな国があり、そこにはポーランドと同じくカトリック教会があつた。ロシア帝国、そしての中にはソ連は、最も重要な政策としてこの地域のカトリック教会をつぶそうとした。ウクライナにはポーランド・カトリックの影響を受けたウニト教会 [ローマ教皇の首位権を認めながらギリシア正教会の典礼、習慣を維持するウクライナあたりに独特の宗教] というのがあって、これがウクライナ民族主義の温床になっていた。ポーランドの教会は西と東の境い目にあり、それなりの性格と役割を持たざるをえない。

コワコフスキ ウクライナ・ウニト教会について言えば、これに対する弾圧はエカテリーナII世の時代（18世紀末）に始まり、ニコライI世の時に一番ひどかったと思う。冷酷、残虐な弾圧があつた。だが帝政ロシアはこれを根絶できなかつた。根絶したのはボリシェヴィキの時代になってからのソ連である。

工藤 ユダヤ人問題も今のポーランドではアクトチュアルな問題ではないか。今も当局はこれを利用して

ミウォシュ 戦前ポーランドのユダヤ人問題を知っている人にはアクトチュアルだろう。

コワコフスキ 政府がユダヤ人問題を利用するのは昔からのやり口だ。

ポーランド文化の将来

工藤 最近、ポーランド作家がどんどん外国へ出ていっている。バランチャク、K・ブランデイス、グウォヴァツキ……。ワイグ監督も西側で仕事をしている。今のポーランド文化は19世紀文化に似てきているのではないか。当時、ポーランド作家の大部分が外国で活動していた。これからはどうなるのだろうか。

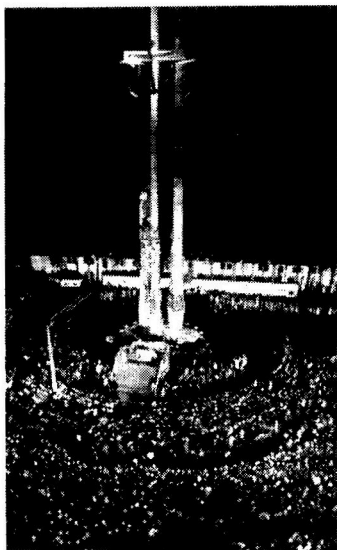
ミウォシュ 非常に悲観的にならざるをえない。戦後すぐ私は、さきに引用したステンポフスキと同じように、「この汚物が世界にまんえんする」と考えていた。ある種の運命論だ。その頃ヴァジクがクラブで酔っ払って私の肩をかかえながら、「おまえはポーランド最後の詩人だ」と言ったのをよく覚えている。でも、たぶん私はポーランド最後の詩人とはならないだろう。その後、当時からすると想像を絶するような事件が次々とおこった。ポーランドは否応なしにソ連化されると皆が信じていた。ポーランドはソ連の1共和国化されるのでは、と。それは根拠のない話ではなかった。もちろん、ポーランドがソ連の共和国になってしまったなら状況は非常に悪化しただろう。しかしその後の動きからはっきりしたのは、過去という要素がとくに東欧では大きな役割を果たし、歴史に圧力となってあらわれるということだ。また、論理的には絶対に生まれてくるはずのない新しい世代がポーランドには生まれてきた。もちろん、ポーランドの体制の犯罪について問えば言い尽せないほどたくさんあるが、同時に社会変革の面でいくつかの業績があった事実も忘れられてはならない。たとえば、高等教育を受けた人の数は戦前と比べものにならないほど多い。また知識人と労働者の境界がある程度消えたのも事実だ。今のポーランドでは何百万の若者が何らかの教養を持っている。それはいろんな分野で活躍している人の苗字を見てもわかる。われわれの世代から見れば喜劇的ともいえる苗字の人〔農民などの出身者。ポーランドでは昔の貴族の血を引く苗字とそうでない平民の苗字が別れている〕が立派な役割を果たしている。これは農村出身の人たちも教育を受けられた証拠である。

コワコフスキ 第2次大戦直後は思想的混乱があった。多くの知識人にとって共産主義は18世紀

啓蒙主義の延長であり、左翼合理主義であった。それが多くの知識人が共産主義体制に合理性を認めた根拠でもあった。しかし現在はこのような共産主義観があったという痕跡すら残っていない。すなわち、思想的観点からすればこの体制は完全に死んだものである。これは楽観的要素といえる。思想的にはヤルゼルスキもラコフスキも共産主義思想をまじめに受けとめていないのは明白だ。それは死滅したのである。つまり、昔の価値観で残っているものはひとつもないし、どれひとつまじめに扱うこともできない。

崩壊するソ連共産主義体制

共産主義体制は権力の正当性の危機を感じている。この体制はその権力の正当性の基盤をイデオロギーに置いていたからである。共産主義体制の権力は民主的選挙に基くものでも、ブルジョアの経済的力に基くものでもない。唯一の正当性の論拠は思想にあった。もちろんだからといって思想がなくなればすぐ崩壊するというものではない。ただまちがいないのは、この危機が根深く、また思想を再び活性化させるのは不可能だということである。同じことはソ連についても言える。今やソ連の権力の正当性を裏付ける思想はソ連帝国主義、国家帝国主義の論理だけだ。しかしこれはポーランドやチェコスロヴァキア、ハンガリーには通用しない。そこで、これからどうなるという問題だが、私はソ連帝国は崩壊の道をたどるほかないと考えている。共産主義思想が末期症状を示している現在、体制に必要なのは新たに権力に正当性を与える思想であるが、そのような思想は存在しない。彼らは権力を維持する根拠を明確に提示できない。なぜなら、それは明らかにロシアの排他的な民族主義に立った国家帝国主義の論理でしかないが、これを明言するわけにはいかないからだ。だから彼らは今、その中間の方法を模索しているが、それは幼稚で、すぐウソと見抜けるようなしろものだ。この帝国が存在基盤を欠き、崩壊するほかない体制となったのは明らかである。残る問題はひとつ。それは、「いつ崩壊するか」ではなく、「どのように崩壊すれば世界戦争をおこさずにすむか」である。ソ連のような国は内部危機を克服するため戦争という賭けに出る可能性が非常に大きい体質だからだ。もちろん彼らとて戦争



グダンスクにある70年事件犠牲者記念塔。塔下部には、ミウォシュの次のような詩が刻まれている。

なんじ、無事の民を虐げ
 なお自らの悪に笑みを浮かべる者よ
 自らを安泰とすることなかれ
 詩人はすべて書きとめている
 詩人を殺すなら殺すがよい——新たな詩人が
 頭をもたげ
 おこないとことばは書きのこされる

義——他の共産主義はもう死滅して意味がなくなっている ——はロシア国内における自由化と改革に対する反動である。つまり奴隷制に戻ったということである。これは歴史的過程の逆流である。ミウォシュ 重要なのは、ある脚しがたい平行線がこの世界に存在していることだ。ヨーロッパでもアジアでもソ連の支配下にある国の国民は体制が何をしてきたかを経験で身にしみて知っている。しかしそれをポーランドのように声に出して言える国民はとも少ない。西側、たとえば南米などは、共産主義の内容をようやくこれから発見しなければならぬのだが、発見した時はもう遅い。キューバのようになってしまう。キューバ国民は体制の本質を認識しただろうが、何もできない。これは地球規模の大きな問題になってきたと思う。コワコフスキ さて、これからわれわれが果たせる役割を具体的に考えると、最も重要なのは、共産圏に住む人々に対し彼らが置かれている実態を認識させるためにラジオなどあらゆる手段を用いて情報を与えることだ。ソ連当局は、自国民がいろいろな情報に接することが何を意味するかをよく知っている。だからこそ巨費を投じて電波妨害をする。巨大な機構が西側の活字や電波が伝わってこないように日夜動いている。アメリカ人はプロパガンダという言葉を嫌うので、情報を流すことはあまり高く評価していないらしいが、反対に東側のでき事を西に伝えることも重要だと思う。ポーランド資料センターがポーランドのでき事を日本国民に伝えているのは、歴史的意味合いを持つ非常に重要な仕事である。

1983年9月20日東京にて〔訳：高橋初子／水谷曉〕

は望んでいないだろうが、他に方法が一切ない状態になる可能性は十分ある。だから、ソ連をいかに戦争をともなわずに崩壊させるかが今一番大きな問題だと思う。

工藤 KORや「連帯」の活動はその試みだった。コワコフスキ そのとおり。「連帯」の活動は歴史過程に平和的に介入したものであり、帝国の腐食を促進させる試みだった。それは最も危険な爆発を避けるべく歴史に介入したのだ。私自身、どのような方法が良いか明確な確信はもっていないが、「連帯」がやった以外の方法はなかったのではないかと思う。

工藤 現存社会主義についてどう考えるか。
 コワコフスキ 現存社会主義とはソ連の支配を意味する以外のなにものでもない。すなわち奴隷制である。ロシアにおいて奴隷制が形式的になくなったのは18世紀末、農奴制が廃止されたのが1861年だった。19世紀末から20世紀初めにかけて奴隷制と農奴制は解体されつつあったが、ロシア革命で両方とも戻ってきた。すなわち、ソ連型共産主

レクセクゴワコフスキ

いかにして

保守的・自由主義的・社会主義者

となるか? ——教理問答

Leszek Kołakowski

“Jak być Konserwatywno-Liberalnym socjalista?”
《Czy diabeł może być zbawiony i 27 innych kazań》

ANEKS, London 1982

《モットー》 前へ退がってくださいノ (ワルシャワの市電で車掌がこう言うのを聞いたことがある。これを、大きな、力ある——けっして存在することのないであろう——インターナショナルのメイン・スローガンとして提案する)

保守主義者の考え

1 人間の生活はいまだかつて改善も合理化もされたことはないし、これからもないだろう。改善や合理化は、見方を変えれば、悪化という代償を支払わずには済まない。それゆえ、いかなる改革案であれ、そのツケはわれわれ自身に回ってくる。言い方を変えて——共存を許す悪、したがって、われわれが同時に存分に苦しむことのできる悪は無数にあり、一方で、たがいに排除しあう、あるいは制限しあう善、ゆえに、十全に享受しつくすことが同時にはけっしてできない善も数多い。どんな自由もどんな平等もない社会こそが最も存在の可能性は高く、完全な自由と完全な平等を共に持つ社会はありえない。それと同じことが、計画性と自治の原則との関係や安全と技術の進歩との関係についても言える。もういちど言い方を変えて——人間の歴史に「ハッピー・エンド」はない。

2 伝統的に受け継がれてきたさまざまな生活様式——家族、民族、宗教的共同体、儀式——がどれくらい重要で、社会の存続とその存続の質にとってどれくらい不可欠なものなのかをわれわれは認識していない。こうした様式を破壊したり、それに不合理の烙印を押したりして、生活、やすらぎ、安全、自由を満足させる機会を増やそうとする考え方はいかなる根拠もない。一方、その

正反対の予想には十分な根拠がある。たとえば、一夫一婦制が廃止されたり、死者の埋葬の伝統的な儀式が工業目的のための合理的な死体利用にとって代わられたりしたらどうなるか。実際、われわれは最悪の結果を合理的に予想できる。

3 啓蒙主義的偏見によれば、ねたみや欲望は食欲さと攻撃性をもたらすが、それはまちがった社会制度の結果にすぎず、制度の変更と共に消滅するという。しかしそんなはずはなく、これまでの経験とも矛盾する（もし食欲さや攻撃性が人間の真の本性と矛盾するのであれば、それをもたらした制度全体が生まれたのは悪魔の仕業だともいうのか?）、そればかりか、社会的に危険な考え方でもある。専制に対する確固とした処方箋がすでに存在する場合にのみ、友好や愛、献身の制度化が期待できるのである。

自由主義者の考え

1 国家の任務とは安全の配慮であるとした古くからある基本原則はいまも効力を持つ。安全の概念は人身と財産の法的な保護のみならず、さまざまな社会保障（失業のために飢えたり、容易に直る病気にもかかわらず貧困のために死ぬことがあってはならない、子供は無料で教育を受けられるべきである——こうしたすべてが安全の概念に含まれる）にまで拡大されるときでも効力を持つ。しかし、安全と自由とをけっして混同してはならない。国家が自由を保証するのは、何かを行い、何かを規制することによるのではなく、その何かを行わず、生活のさまざまな分野を規制なしにそのまま放置することによってなのである。現実には、安全は自由を代償にするとのみ増大する。

また、人びとを幸福にすることは国家の任務ではさらさらでない。

2 個人のイニシアティブと創意がはぐくまれる下地がすでに存在しなくなったとき、人間の集合体を脅やかすのは停滞だけではない。退化と、その結果としての死にまで事態は進む。人類の自殺は想像できても、人間がアリの社会をつくるとは想像できない。ようするにわれわれはアリではないからだ。

3 競争がすべて廃止された社会にも、なお創造と進歩にとって不可欠の刺激要因が機能するという推論がある。とうてい信じられない考え方である。平等の拡大それ自体は目的ではなく、手段にすぎない。言葉を変えれば、平等の拡大は、もしそれが恵まれない人びとの生活改善ではなく、それより良い暮らしをしている人びとの生活程度引き下げの結果しか導き出さないならば、目的にする価値はまったくない。完全な平等とは内部矛盾した理想である。

社会主義者の考え

1 利潤の追求が生産活動の唯一の調整装置であるとき、今日の社会が破局を迎えるおそれは、利潤が調整要素から完全に排除される場合よりも小さくない、もしかするとより大きいかもしれない。大多数の安全のために経済活動の自由を制限し、貨幣が自動的に財産とならないように努めるのは善意からなのである。しかしながら、自由の制限は自由の制限と呼ぶべきであり、それを自由の特殊な形態と言ってはならない。

2 完璧な、葛藤のない社会の実現不可能性、

このことから、現存する不平等の形態すべては不可避であり、利潤追求の形態はすべて正しいと結論づけるのは偽善であり、健全な理性に対する裏切りである。歴史哲学的悲観主義は、その奇妙な推論に基いて、累進課税は恥辱と醜聞であるという結論を引き出した。この悲観主義は「収容所群島」をつくりあげたものとなった歴史哲学的楽観主義と同様に疑わしいものである。

3 社会の側からの经济管理に対する欲求は尊重すべきである。もともと、それは必然的に官僚主義の増大を意味する、なぜなら、この管理は代議制民主主義なしにはけっして存在しないだろうからである。そのため、この管理の進展が内包する自由に対する脅威にいかにして対抗すべきなのかを考えねばならない。

*

上記3つの理念上の規準はたがいに矛盾しないように思われる。それならば、保守的・自由主義的・社会主義者になることは可能である、あるいは——同じ結論になるが——これら3つの要素はもはや現実生活には適さず、すでに削除された選択肢である。本稿の冒頭で触れた、大きな、力あるインターナショナルがけっして存在することがないであろう理由は、そのインターナショナルが人びとに幸福を約束できないからである。

(1978)

[訳：篠崎誠]

横井久美子 special concert

モンテカシの
美しい茶子
—ポーランドの心をうたう—

ゲスト・村上弦一郎 (ピアニスト)

筑紫 哲也 (朝日新聞編集委員)

日時・12月7日(水) PM 6:30開演

場所・日仏会館 (TEL 291-1143)

国電お茶の水駅(水道橋寄り出口)下車
徒歩5分

前売・3000円 当日・3300円

お問い合わせ・横井久美子事務所

国立市東3-18-15 TEL 0425-77-4235



夏の列車旅行



マレク・ノヴァコフスキ

訳：駒田鞠子

Letnia Jazda Pociągami Marek Nowakowski
"Raport o Stanie Wojennym II", Instytut Literacki, Paris, 1983

【編集部注】 マレク・ノヴァコフスキは1935年ワルシャワ生まれ、短編小説にポーランドの人々の哀歎を点描するのを得意とする作家である。既に、昨年4月1日付読売新聞夕刊に「バスのなかで」、『ポーランド月報』第7号(82年9月30日)に「2072日」が邦訳掲載されている。上記2作品を含む戒厳令下のワルシャワ生活を描く40篇が「戦争状態についての報告Ⅰ」としてまとめられ、パリで刊行されたのが昨年春。日本でも11月末に晶文社から「ワルシャワ 冬の日々」として出版される予定である。ここに掲載する「夏の列車旅行」は、続編「戦争状態についての報告Ⅱ」(1983年春、パリ刊)のなかのひとつである。

駅はしだいに活気を取り戻した。戒厳令最初の数週間は、あらゆる動きが死んだように止まっていた。通行許可証なしには旅ができなかった。しばらくすると人々は慣れ、通行許可証をもらいはじめた。やがて禁令が解かれ、人々は普通に移動を始めた。今や夏のシーズンが始まりを告げ、駅は群がらる人の波でいっぱいだ。窓口前は長蛇の列。切符を買うのに延々半日つぶさねばならぬ。駅のホールで野宿する奴もいる。朝から行列に並び、夕方近く切符を手に入れ、その場で夜をすごして次の朝の列車でバカンスに旅立つ。母親たち、子供たち、年寄りたち、荷物の山。ちゃっかりした奴らは車庫からの引き込み線のどこかへ出向き、鉄道員と交渉する。客車は閉まっていて、鉄道員を味方しない限り中に入れない。

私は目ざす列車の発車時刻の数時間前に駅に行き、行列に並んだ。立ちっぱなしで待ちつづける。私の前には数えたところざっと200人。何人かがタバコを買いに列を離れてはまた戻るので、正確なところはわからない。列はのろのろと進む。ガラス張りの丸屋根の下はひどく暑苦しい。立っているのがつらい。汗がにじむ。ここ1時間で窓口がさばいたのはおよそ40人だ。しょっちゅう口論になっては窓口の業務が遅れる。2時間たった。私は3度タバコを買いに行った。どう少なくみてもまだ100人は私の前にいる。発車まであと1時

間半。並んで待っても無駄だろう。前の方に割り込ませてくれるよう頼んでみようか。入れてはくれまい。もう何人かが頼むのを見た。みんな断わられた。人々は疲れ、いらだっていた。頼んだところで見込みはない。ひょっとしてささやき声で頼んでみたら? 窓口近くの人柄のよさそうなきかけの人を眺めながら考える。危険だ。うまく話が通じるか、さもなくて行列のうしろまで響く大声で罵倒されるか。「卑怯者! 並びもしないで切符を買おうなんて!」他の人々も彼に加勢する。口々に罵詈雑言をあげてくる……。私は行列を後にした。2階のビュッフェへ向かい、飲み物の行列に加わる。こっちは少しましだった。待ったのは30分ですんだ。オレンジードを飲みます。

戒厳令前は切符なしでも旅行ができたものだ。車掌と話をつけて。まず車掌に話しかける。彼は席を見つけてくれ、検札から守ってくれる。列車を降りる前、正規運賃より少し安い金額を渡す。そういうならわしだった。今はどうなっているかわからなかった。戒厳令下ではいろいろならわしが変わったりなくなったりしている。新しくできた障害や規律強化のせいで。

あてはなかったが、私はプラットフォームに立った〔注:日本のような改札はなく、切符なしでホームに入れる〕。なにせ私には失うものは何もない。



い。ホームは人と荷物でいっぱいだった。列車を待ち受けて熱気を帯びている。列車は全席自由席。強い者やほっこい者だけに座席にありつくチャンスがある。

列車がホームに入りますとのアナウンス。人の群れがホームぎわに押しよせる。列車が入って来た。当駅始発のはずなのに、すでにかかなりの人数が乗っている。引き込み線のどこかで鉄道員にとりいったちやっかり屋どもだ。あつというまに客車のドアに人が殺到した。あちこちで押しあいが始まる。人が詰まってしまい、前へも後へも動きがとれない。私は戦闘に加わるのをあきらめた。車掌の様子をうかがう。若い男だ。列車長〔管理責任者〕と一緒にいる。私は彼らの方へ歩み寄った。切符がないんだと話す。

列車長は半白の老練な鉄道員といった男で、じっと私を見つめた。

「割り増し料金の切符を作ってやんな」。彼は車掌に命じて歩み去った。

車掌は鞆の中の用紙つづりを手にとった。

「何もそんなもの書かなくても」私はいわくありげな声でささやく。「どこか座席をみつけてくれませんか」。

「あの混雑ですよ」車掌はそう言って押しあいへしあい続けている客車のドアを示す。それからさっきの列車長と同じ目つきでじっと私を見つめた。

「こちらへいらっしゃい！」短い観察の後、彼は腹を決めたらしい。用紙つづりを鞆にしまいこむ。

彼と私は一番前の客車のわきで止まった。カーテンを閉めたコンパートメントがいくつかあり、

窓に「公務専用」と書いた小さな紙が貼ってある。車掌はポケットから鍵をとりだした。ドアの鍵だった。彼はドアを開けた。私たちは誰もいない車内の廊下に立った。

「前払いです」彼は言った「正規運賃プラス100ズウォチ」。

「つまり、昔どおりってことか、ただ値上がりしただけで」私は車掌に金を渡す。「恐いことないのかい、あんた。戒厳令だぜ」。

「お客さん！」車掌が笑いだした。陽気で正直な若僧だ。「何を恐がるっていうんです？ 戒厳令前は『連帯』メンバーのお客さんもいたし、仲間の鉄道員のひとりも『連帯』だった……。今じゃまた昔どおり、誰も手の内を明かさない。つまり、誰でもがそれぞれなりにうまい汁を吸えるってことでしょ、ちがいます？」

なるほど、一理ある。

私は公務専用コンパートメントに座った。気持ちよい広々としたスペース。鉄道員がひとり窓ぎわで居眠りしているだけだ。ほどなく廊下の方から、男の、おしころした声が聞こえてきた。誰か車掌と交渉しているのだ。

「妻と一緒になんです……」声が言う。「新婚旅行なんですよ、だから……」。

交渉はすぐまとまった。コンパートメントに若いカップルが入ってきた。豊満なバストの娘と顔のはげあがった男。男はばかでかい荷物をしょっていた。鉄道員は目を覚まし、うっとおしげに2人を見やった。

「ね、ごらんよ、君……」はげかかった若者は大きなため息をもらした。「どうにかうまくいったら。彼は額の汗をぬぐい、私と鉄道員に愛想よく笑いかける。「こりゃあ快適だ」。

彼の言うとおりだ。素敵な旅が約束されていた。座席は4つしかふさがっていない〔注：ふつうひとつのコンパートメントは6人掛け〕。

私は窓からのぞく。列車長はわれわれの乗っている車両のステップに立っていた。

「ご乗車お急ぎ下さい！」長々と声をのぼして叫ぶ。笛を口にあてがう。軍事化政権の勇ましくも謙厳実直な公僕——。聞いてあきれるわ！

(終)

不当な映画審査に抗議する

アンジェイ・ワイダの公開状

Andrzej Wajda List otwarty do Ministra Kultury i sztuki d / s Kinematografii
Stanisława Stefańskiego
"Wezwanie" 2-3, 1983r.

1982年5月12日 パリ

文化芸術省映画問題担当大臣
スタニスワフ・ステファンスキ殿

1982年4月23日にリシャルド・ブガイスキの映画『尋問』の審査が行われた。私はその審査結果にも、またその経過にも同意できないことをここにぜひともお伝えしたい。

この映画は私が責任者をつとめる映画製作ユニット「X」で製作された。そのため、また、われわれはこの映画作家のデビューに責任があると考え、私は審査会に参加しようとする努力をした。映画は私がパリから帰るまえにしかるべく完成していた。私は審査会へ出席するだけのために『ダントン』の準備作業を中断してパリを発ちワルシャワへ向かったのだが、残念ながら私のワルシャワ滞在中には審査委員会は説明のつかない、あいまいな理由で召集されなかった。

パリにはわれわれが撮影を開始するのを待ちわびている人々がいた。私は国の外でも文学監督であったし、映画ユニット「X」の製作責任者でもあった。儀式はわれわれの背後で行われた。私にはどうしてもそれがまともなものであったとは思えない。

審査委員会の議事録を熟読し、検討してみたうえで、私は断言する。われわれはこれほど不吉なものにかつて出会ったことがない。

審査会の議論をみれば、参加した委員たちの大部分が、こうした委員会に出席するための芸術上の専門知識をなんら有していないことが明らかだ。かれらは映画作品を評価するしかるべき資格に欠

けた、もっぱら政治上の専門知識だけに頼っている人間たちなのだ。審査委員会が召集された目的は——長年にわたって委員会の機能はそうだったが——大臣の私的諮問機関として大臣を補佐し、映画の製作者に対してはその作品を芸術的観点から批評することだった。映画の政治的価値を判断するためなら大臣と検閲局がある。

検閲においてわれわれの同業者の一部がすばやい変わり身を示すのは、実際には——ヴァシコフスキ氏がほのめかしたように——かれらがむしろほかのことに関心を集中せざるをえないからだ。

審査の場ではじめて不愉快な事件が起きた。審査対象の映画について他の人びととは異なる、肯定的な意見を持つ疑いのある人物は、発言を禁止され退場せざるをえなかったのだ。かれらは委員会メンバーとして正当な働きをし、また、映画の分野において誰もが認める權威にふさわしい業績をあげているにもかかわらず、あなたはかれらを追放した。

こうした構造では——もう一度くり返すが——委員会の活動は映画芸術にとって利益にはならないと私は思うし、委員会そのものも私にとっては何らの權威も持たなくなる。

話を具体的にするため、上に述べた状況を最も端的に示すと思われる意見を3つだけ取りあげる。私の同業者（映画監督）のヴァシコフスキ、ベテルスキ、ポレンバの3人である〔3人とも体制派で、映画監督としての腕はさほどでない〕。

ヴァシコフスキは言う。「……この作品を製作に回した責任者は誰なのか、私は、厳密な、きわめて厳密な分析、調査をここに要求する。なぜなら、要するにこの映画にはわれわれのお金をかけるべきではない。これが私の第一の抗議だ……



ダントン 演出中のワイタ監督

私はこの抗議をさらに敷衍したい、すなわち、わが国家に戦争状態が導入されたあとでこの映画が完成したのはいったいどういうことなのだ？ われわれはこの点について、なんならメンバーを少々変えた方が良くもしいかもしれないが、さらに長く話し合いをつづけるべきだと思う。

ヴァシコフスキ氏に申し上げたい。あなたがブガイスキの映画製作費について言うのであれば、あなたはそれのお金が、少なくともあなたのお金ではないとも言うべきだった。なぜなら、ご存知のとおり、あなたの作品はどれも利潤をもたらしたことはない。一方、私のお金はそこに入っている、なにしろ私の映画は間違いなく映画界をもうけさせているのだから。われわれの目的、すなわち映画救済委員会〔『月報』7、8号参照〕（これにはあなたも参加している）の目的は、経済的に自立した、自給自足の、将来的には利益をもたらす映画界のモデルをつくりあげることだった。いまあなたが「われわれのお金」と言うということは、あなたとあなたのお仲間たちが映画を撮るのに回しているフィルムは私の映画、今日あなた方が激しく攻撃している映画を売って得たドルで買ったものだという事実をお忘れらしい。

あなたは、なんと、検事に調べさせるとまで言っている。私はその検事に要求したい——ブガイスキの『尋問』にとりかかる前にヴァシコフスキ

の9つのシナリオの問題にとりかかるべきだ（この問題については、私が出席した国会の文化問題委員会の席上、最高監察局〔NIK〕の代表もふれていた）。あなたはそれらのシナリオでお金を受けた。しかし製作など一度もしたことがない。もしかしらば検事はあなたのアメリカでの息抜きの問題を調べているのかもしれない——あなたはズウォティ以外のお金の支払いを受けていた、しかしその息抜きは映画作品となって実をむすばなかった、などなど……。検事がこれらすべての問題をくわしく調べたならば『尋問』に興味をそえられるかもしれない。

あなたが党細胞〔POP〕の第一書記であるという事実は、あなたの経済的活動に対する責任を免除するわけではないのだ。

ベテルスキ氏はブガイスキの作品に芸術的価値を認めることを拒否して、この監督には「フィルムの切り貼りができる」という事実ぐらしか価値らしい価値はないと言った。もしベテルスキ氏が新人のブガイスキと同じくらい「フィルムの切り貼り」ができ、同じくらい映画の製作ができたならば、彼がこれまで映画界で過した長い歳月、彼を苦しめつづけたコンプレックスの大半はおそらく解消していただろう。

ここで思いつくのは、ワンダ・ヤコボフスカと私の旧い友人たちがかつて『灰とダイヤモンド』とアンジェイ・ムンクの作品群に対してとったのと同じやり方、同じ態度である。つまり、『尋問』にまぶしいほどの新人の登場を感じられない人間は誰であれ、映画の批評などする権利はまったくなし、そうした批評をするために召集された委員会に出席する権利もない。

3人のなかでいちばんまじめなのが私の古くからの友人ボグダン・ボレンバである。どうやら彼はわが国の歴史の最も劇的な瞬間瞬間にとことん光を当てたいらしい。私にとっては、『尋問』の登場人物たちの背後にもっとはるかに巨大で、下級警察官にあれば単劣で、悲劇的な役割を強いた勢力がいることは自明である。そうした勢力の存在は今日のポーランドではおそらく誰にとっても秘密ではないだろう。1945年のことをよく覚えている。私はクラクフの自由広場でたまたま拘束され、尋問された。その建物で聞いた言葉は外国語だった。ユダヤの言葉ではない。もしボレンバ

の映画にこの事実が正しく反映されていたのであれば、われわれみんなが彼に、そのような映画をつくってくれたことで深く感謝しただろう。

要約しよう。いままで書いてきた審査会の経緯には深い悲しみと懸念を持つ。もしこうしたやり方をこれからもそのまま押し通すのであれば、大臣殿、あなたは少数の党芸術家グループと映画界の大多数との間の最終的な衝突へ最短の道に立つことになる。

その危険を避けるため、私はポーランド映画人協会議長としてこれまで何度も注意をうながしてきた。

私は心配している。いまの審査委員会に存在する悪のすべてが、今度あなたが設置を決定したもう1つの機関、つまり、シナリオ委員会でもふたたび繰り返され、まかり通るのではないか。

そのようなたぐいの委員会設置は、時代を、暗く希望のない50年代へ押し戻すものだと思う。そんなことのためにわれわれは、成熟し生き生きと躍動する映画界をつくりあげたわけではない。映画製作ユニットの芸術的創意と自治を発展させ、蔑まれ笑ひ物にされていた映画界をきちんと復活させたのはそんなことのためではないのだ。

映画人協会の「棚上げ」は長いあいだ実現しな

かった、それと同じくらの期間は審議のための新しい社会団体の設立も——何の相談もなかったのだ——ではほしくないだろう。そのような団体は誰を代表することにもならないし、映画界に受け入れられるはずがないのだから。

最後に、大臣が私の手紙の趣旨を受理し、『尋問』の再審査を行うにふさわしい資格をそなえた人物を指名するであろうとの希望を表明しておく。

映画ユニット“X”芸術責任者
アンジェイ・ワイダ

追伸 戒厳令がつづくあいだ、国内向けの手紙はすべて開封で送らねばならない。それがこの手紙をあなたに届けられる唯一の形式、すなわち公開状になる。
A.W.

原注 『尋問』——脚本・監督 リシャルド・ブガイスキ、撮影 ヤツェク・ベトリツキ、製作責任 タデウシュ・ドレヴノ、主要配役 クリスティナ・ヤンダ、アダム・フェレンツイ、ヤスシュ・ガヨス、アグニェシカ・ホラント。映画ユニット“X” 1982年作品。

〔『ヴェズヴァニエ』1983年2/3号 訳：篠崎誠一〕

ポーランド——支配者の辞書

ポーランド人民共和国

オーデル川とブク川の間に位置する国。頭はモスクワに、心はパリに、胃袋はワシントンに、ポケットはボンにあり、首相はテルアビブにいる。

ソ連

一国家。あるいはむしろ、平和時強制収容所。様々な気温の様々なバラックがあるが、イデオロギーはどこも同じである。

レーニン主義

あらゆる場合に用いられ、あらゆる議論を正当化する、ひとそろいの引用文。

カラシニコフ

ソ連のマシンガン製作者。世界の社会主義の強大化に最も貢献した立役者のひとり。

ZOMO

The beating heart of the Party. (党の、脈打つ [また、殴る] 心臓部)。

(Voice of Solidarność No.73 付録より)

戦いのあとの風景

アンジェイ・ワイダ監督 ポーランド映画
1970年作品 カラー105分
主演 ダニエル・オルブリフスキ
スタニスワヴァ・チェリンスカ

11月16日まで 毎日21:10より上映中
料金 (当日・一般) 1400円
会場 欧日協会「ユーロスペース」
渋谷区桜丘町24-1 東武富士ビル2F
TEL 461-0211

戒厳令下の地下出版事情

——独立出版社『クロング』インタビュー

Wywiad z wydawnictwem "Kraąg"
"Kultura" Nr4/427, 1983, Paris

【編集部より】 戒厳令下、厳しい取締りにもかかわらず地下出版は活動を続けていた。その様子を垣間見させるインタビューを掲載する。『クロング』(Kraąg、輪、サークル、仲間といった意味)は、戒厳令下も以前とそう変わらぬペースで出版を続け、健在を示している出版社である。

問 出版社『クロング』の創立について……。

答 『クロング』は『グウォス [声]』(KORの系統に属する反対派月刊誌)から別れたグループが作ったものだ。だがこんなことはもう忘れられているし、ここ2年間におこったことに比べれば別に重要じゃない。だいたいこう言えるだろう、つまりぼくらは当時、政治から——より正確に言えば民主的反対派内での政治論争から、すこし離れたところにいたかった。ぼくらが望んだのは、「時代を超えた」——つまり、5年、10年、20年先に残り、いつの日かぼくらの子供にも読ませられるような、価値ある本を出版することだった。『グウォス』を出ると決めたとき、新しい出版社の名前をどうしようかと考えた。当時配布係のチーフだったこの仕事のベテランの1人が『クロング』の名を] 思いついた。みんなその名が気に入った。ぼくらが出版した本が最初に出たのは1981年2月だった。

問 どんな本だったんです？

答 マウリツィ・モフナツキの「ポーランド民族の蜂起の歴史」第2巻だ(第1巻は『グウォス』で出していたからね)。それからじきにステファン・コルボンスキの「ポーランドの地下国家」第1版。

問 出版所創設時の話に戻りますが、どんな道具を使っていたんですか？

答 レックス・ロータリーとゲステットナー[ともに西側の印刷機のメーカー]のおんぼろ輪転機数台。今は身の安全を守るために言えないけれど、いつか可能になったらこの機械がどんな環境で(生産的に!)動いてくれたかお話ししよう。大した宣伝になるから、どっちのメーカーもぼくらに感謝しなくちゃならなくなるだろう。

問 もうすこし具体的に言うと……？

答 本当に、ぼくらの仕事についてはあんまり明らかにできないんだ。機械は、いろんな自動車にのせて運んでいる。フィアット126P[フィアット社のライセンスで生産されているポーランド国産小型車]にのせた図が一番こっけいだね。ショックを和らげる工夫なんて全然なしで田舎道を走ることもしょっちゅうだ。機械は冬も、時には氷点下の寒さの中やじめじめした(たとえば壁から水がしたたっているような)所で、印刷のことなんてろくに知らない人たちに使われながら動いている。紙は紙で文明国のどんな基準にも落第するシロモノだ。交換部品の一部は(実質的には、ローラーとくさび形ベルトとインキ出し装置のいくつかの部品以外は全部)国内で作ることができる。もちろん純正部品ほどありがたいが、ともかくそれでもローラーは回るから……

問 それで本当にあんな速いペースの出版を？

答 具体的に生産規模を示すためにひとつ例をあげよう。コルボンスキの「ポーランドの地下国家」第1版(1981年3月)、150ページで4000部だから延べ60万ページ、イコールA4サイズの紙600メ、重さにして約2トンだ。急造の印刷場所、湿気を含んだ紙、純正じゃないあやしげなインク、印刷場所へ毎日通うのも一苦勞、などなど。生産日数は約3週間、1日10時間以上の労働だね。

問 どうしてそんなに急ぐんです？

答 安全のためさ。早く生産が終わればそれだけ手入れをくろう危険性もへる。

問 手入れはあったんですか？

答 『グウォス』のころも含めて考えれば、1979年8月から1982年末までにかなり大がかりなのが2度あったが、壊滅的打撃ではなかった。今の

条件に比べれば軽微なものだ。

問 『クロング』は今でも「戦前〔戒厳令前〕」の規模で活動を続けている唯一の出版社ですね。1982年にはいって20冊以上（かなりの大きな本をも含んで）を出版している。これは賛嘆すべきことですが、いったいどうしてそれができるのですか？

答 「連帯」の時期、ぼくらは出来る限りにおいては機密性というものを保とうと努め、自分たちの仕事の詳細や、特に印刷している人々については明かさなかった。そうした甲斐はあった。1981年12月12日から13日にかけての深夜に拘禁されたのは、ぼくらの中で名を明らかにしていた3人の代表、つまり社会学者のマレク・タビン、歴史学者アンジェイ・ロスネル、生物学の学生ヴィトルド・フェレンスだけだった。あとの者は無傷で、警察に知られないまま残った。双方にとって残念なことだが、出版社の安全のためにぼくらは「拘禁された人たち」と別れねばならなかった。他の者は活動を続けている。あたりまえのことだがぼくらは天才でも全知全能でもない。ぼくらは時おり理性より幸運の方に恵まれているだけだ。

問 たとえば？

答 出版社では安全確保の原則を厳しく守ることが義務になっている。しかしぼくらだって人間だ。時には「近道したい」——つまり秘密活動の原則をやぶって、早くで安上がりな方法をとりたいという誘惑にかられる。もしやそれがうまくいったとしたら、とね。たとえば、夜間外出禁止の時間が近づいている時に「品物」の配達をしていて、常識的には明日に延ばすべきなんだけれど、それが今日中に簡単にすんでしまうんじゃないかな、と考えるとか。紙の重さで車がうしろをひきずるように走って、街頭の警官がちよっと見ればあやしむほどになるのに、1回の輸送でうまく本を運びきれられるかもしれないと思うとか。こういうのは時間の節約になるだけじゃなくて、供給制限になっているガソリンの節約にもなるからね。それから、ろくに後始末もせずに印刷機を印刷所にほっておいて大丈夫なんじゃないか——次の印刷人が来るまでお待ち、って。さらには、予告されたデモの口が近づいて街中を公安（UB）が厳しく見張っているのに、車いばい本を積んでワルシヤフを通り抜ける（大きな道路は避けて）ら

れるんじゃないか、なんてね。こういった誘惑のどれも（その他にも言葉で言えない困難や不可能なこと）がぼくらひとりひとりを、まあ最低月に2～3度は待ちうけている。時にはぼくらは誘惑に負ける。たいていそのことは仲間に打ち明けない。これまでは運が良かった——この先も幸運が続くかどうか？

問 もっと強い規律に従わせるわけにはいかないのですか？

答 それほど簡単な話じゃない。第1に、ぼくらの出版所は仲間意識と友情を基礎にして機能している——そういう所に厳しい軍事的規律をもちこむのはひどくむづかしい。第2に、いまあげたような誘惑が人をひきつけるのは、今日できることは先延ばしにしちゃいけない、明日では遅すぎるかもしれない、という信念があるせいもあるからだ。第3に、ぼくらは心理的に大きな重荷を背負って生活しているんだ——「やばい」仕事はできるだけ早く片付けて、「普通の」生活に、家族や友人のもとに戻りたい、という。

問 捕まるのが恐くないですか？

答 そりゃ恐いよ。ぼくらの多くにとって、捕まるというのは3年から4年の刑を宣告されることだ。それはよくわかっている。これは「冗談事じゃない、ゲレク時代のように48時間留置ではすまされない。ただ、ぼくらはこの意識で余縛りになっていないから、将来に希望をつないでいられる。もし公安がついにぼくらの尻尾をつかまえても——ぼくらはその時点まで既に、戒厳令下でも活動できるんだってことを他の人々に示しているんだ。たぶんあとつぎの火種が出てくる……

問 あなたがたはいったい何者なんですか？

答 普通の人間さ。高等教育〔大学など〕を終え、様々な職業で、おおむね25歳から35歳のあいだのね。ぼくら自体の人数はそう多くないが、信頼できる多くの協力者や配布者グループがいる。残念だがこれ以上ぼくらのことはしゃべれない。

問 あなたがたが一貫して自分たちを「会社」と呼ぶのは、自分たちの活動を通常の企業のカテゴリーで考えているということですか？

答 イエスともいえるしノーともいえる。ぼくらは通常の企業ではない、なぜならぼくらは市場機構の、需要-供給バランスの外で活動しているし、広告もできないし。企業長もいない、管理評

議会もない。そのかわりぼくらは財政的に自給自足だ。ぼくらの活動は金もうけにはならない。ぼくらは自動車を持ってない、一戸建ての家も、場合によっては自分の住宅すらない。売り上げは全部次の生産につきこむ。それもすべて、できるだけ短期間にできるだけ多くの本を出版するためだ。ぼくらにそれができる間は。

問 しかし読者は独立出版物は値段が高いとこぼしていますが……。

答 ぼくらは、NOWa〔自立出版所〕と並んで、戒厳令下で独立に活動している中で一番安い出版社だよ。残念ながら、1981年6月の第1回全国独立出版者大会でとり決められた価格水準を守るのは無理だけど、値上げ率は約50～60パーセントだ。国営出版社の本の方がよほど値上がりしている（100～200パーセントか時にはそれ以上）。

問 ここまでは生産の技術や状況についてうかがったわけですが、こんどはあなたの方の活動の本質的な面について少し。どんな本を出版しているのですか？

答 このインタビューの最初にも言ったように、この出版社を作るにあたってぼくらが考えたのは「時代を超えた」性格の本——いつの日かぼくらの子供たちにも読ませられるような本——を出すことだった。ぼくらの出す本の裏表紙にはこう書いてある。「出版社『クロング』は、いかなる政治グループともつながりを持たない社会的出版機関である。われわれの目的は、ポーランド史、近隣諸国の歴史、そしてわれわれの時代の政治、経済、社会思想、文学に関する作品や情報を広めることである」。ぼくらは今でもこの言葉に忠実だ。中でも特に重視しているのは歴史だ。社会の歴史教育と協力して働かねばならないと思っている。とりわけ現代史ハンドブックに重点をおいている。有名なツワイスワフ・ポグ＝マリノフスキの本（『ポーランド近現代政治史』第3巻1939-1945。1巻は戒厳令前に出版され、2・3巻は1982年はじめに出た）に続いて、A・アルベルト（ペンネーム）の「ポーランド現代史1918-1939」、そして1982年のヒット作ともいべきK・ケルステン（ペンネーム）の「ポーランド人民共和国の政治史概説1944-1956」を出した。この他にもハンドブック的性格のものとして、B・ツイピンスキ「同一性の起源」がある。これは中欧～東欧諸国の教会の現代史を描い

たものだ。さらに、回想録（B・オベルティンスカ、J・ノヴァク、N・マンデルシュタム）、論文や報告書（最近ではたとえば、ストシェビエリニクとヤヴォルの収容所の話を書いたT・マゾヴィエツキのレポート）、ドキュメントなどがある。その他には、現代ポーランド文学（T・コンヴィツキ、M・ノヴァコフスキ、J・グウォヴァツキ）、エッセーや文学評論（A・ドラヴィチ、R・ジマンド）、詩（C・ミウオシユ）。今プロジェクトにはいつているのは、（詳しくはいえないけれど——だって捕まるのはゴメンだからね）世界の現代政治小説、現代社会思想、人文主義思想の古典などだ。一部は既に印刷に入っているし、他のは編集段階にある。

問 編集部のファイルにはいくつぐらい作品が入っているのです？

答 編集の仕事に入っているのは40作以上。進行状況は様々だ。いくつかはものすごく手間がかかって、少なくとも1年半後でないとう出版されない。

問 つまり将来を見通して計画をたてている？

答 警察に狙われたりしない普通の環境で人がするのと同じように計画をたてるようにしている。

問 この出版社は単行本だけを出版するのですか？

答 いいや、定期刊行物も時代の証人であるにかわりはない。戒厳令前ぼくらは、パリにあるインスティトゥ・リテラツキ〔亡命ポーランド人の出版社〕が出している『歴史手帳（Zeszyty Historyczne）』を全範囲内出版した。戒厳令下の今は中断のやむなきに至っているけれど、いつか再開することを約束する。その他、戒厳令までは『共和国（Res Publica）』『鼓動（Puls）』『王の森（Silva Rerum）』という定期刊行物を出していた。最後のだけは今も続けている。それから、現在は『Kos』、『批評（Krytyka）』『戒厳令年鑑（Almanach stanu wojennego）』を出版している。こういう雑誌のいくつかは赤字なので、単行本の売り上げ利益をまわしている。

問 最後に、われわれはあなたがたの出版社にどういう期待と祈りを持たばよいのでしょうか？

答 まず第1にぼくらの仕事が続けられることを、第2には、他の出版社が良き競争相手に育つように祈っていてほしい。〔訳：高橋初子〕

「連帯」が成し遂げたもの

ハーバード大学に対する書簡

レフ・ワレサ

Lech Wałęsa's Letter to Harvard Univ. May 1983

Uncensored Polland News Bulletin, No19/83, London, 30 Sept. 1983

〔編集部注〕レフ・ワレサ「連帯」委員長は本年6月、米国ハーバード大学から名誉博士号を授与され、授賞式に際し訪米して講演するよう依頼を受けた。しかし、いったん出国すれば再入国が不可能になると判断したワレサ委員長は、この依頼を断り、かわりに授賞式で読みあげられるべきメッセージをハーバード大学に送付した。以下にその全文を紹介する。原文は、地下新聞「プシェチシフト」（夜明け前の意）第8号、1983年8月に掲載されたもので、英訳者によれば、その完成度の高さからして専門家の援助の下に作成されたことは明かだという。このような事情も、ワレサ委員長の考えを最も包括的に述べたこのメッセージの価値をいささかでも損うものではないと判断してよいであろう。なお、「連帯」が成し遂げたもの というタイトルはわれわれによる。(訳：水谷颯)

ハーバード大学の学長および理事のみなさん。

1980年8月14日の朝、私は労働者の最も基礎的な権利を求めるストライキの指導のためグダンスク造船所の壁を乗り越えました。この瞬間がポーランドにおける偉大な変化の時代の幕開けになると誰に想像しえたでしょうか。3年後の今日、私の言葉がハーバード大学の名誉博士号授与式において演壇から読み上げられるなど誰が想像しえたでしょうか。遠いグダンスクの無名の1労働者がこの栄誉を授かるまで実に多くのことが生じなければなりません。それは、授与式に本人がいないというこの事実そのものによっても明らかです。

わかりやすく伝えるにはこの上もなく難しい——ほとんど伝達不可能であるとさえ言える——重要な経験が数多くあるという事実を認めざるをえません。ポーランドの矛盾をはらんだ劇的な状況の下で何が起きているかはありきたりの言葉ではとうてい表現できません。その意味を知るにはそこに自ら参加しなければなりません。みなさんの頭の中に刻み込まれているあなた方の言語にはポーランドには存在しない多くの概念が含まれています。逆もまた真実です。政治、国家権力、プロパガンダ、右翼、左翼、社会主義、現実主義

——こうした言葉、そしてわれわれが日常使っている他の多くの言葉は、米国とポーランドのようにまったく異なった国では意味も異なっています。これらの言葉がポーランドの現状の下で使われる時、理解はさらに一層困難となります。持つ意味が政府当局者と国民の大多数とは違うからです。しかしそれでもわれわれはお互いに理解を求めなければなりません。共通するものを探し求め、われわれを隔てるものすべてを取り除かなければなりません。

ポーランドでは多くのことが起きている。これら諸事件はヨーロッパのこの部分の政治的諸関係にも影響していると言ってもおそらく誇大妄想ではないでしょう。これをポーランドの19世紀の諸反乱、きわめてロマンチックで誇り高く、しかし非効果的で非現実的な諸反乱の単なる延長にすぎないと考える人が多くいます。「連帯」に今日のポーランドの政治と経済の現実とは無縁な旧式のユートピア運動の特徴を見出す人もいます。こうした見方は改められなければなりません。アメリカの世論形成に決定的な役割を果たすみなさん方を前にして、この問題について語る機会を与えられたことをうれしく思います。

ますます非現実的と見えたのは実は1980年のス

トライキ以前のポーランドの状況でした。経済は全面的崩壊へとまっしぐらに進み、借り入れた金は支配者集団によって無頓着に浪費されて行き果てようとしていました。ところが新聞は、業績について、生活水準の向上と全国民の満足についてなお書き続けていたのです。経済学者や専門家たち——なかには権力の座にきわめて近い人もいました——の警告にもかかわらず、成功をプロパガンダすることが義務でした。「不満」や「危機」、「ストライキ」といった言葉は公式の語彙としては禁止されていました。そして同時に、共通の民族的経験と日常の共同生活の結果である社会的結合の崩壊が、自然な連帯の崩壊が進行しました。イデオロギーの大衆組織と党機関が有機的な真の社会組織にとって代わっているという条件の下で、個人々人、そして事実上社会のほぼ全体がますます孤立感と無力感を深めていました。イデオロギーにより現代的に組織された国家において直接的テロの代役をつとめる心理的圧力の結果、この体制の下ではいかなる変化もいかなる進歩もありえないという確信が生まれました。「不正は見て見ぬふりをすればよい、自分1人では何もできないのだから。連中は私が本当の考えを明かすのを待っている」。これが当時の普通の態度でした。長年にわたる圧力は奴隷の心理を生み出しました。工場と同僚たちは自らをとりまくこの体制にうっ積した憎悪を抱いていたにもかかわらず無力感にとらわれていました。ごく少数の人たちが独立労働組合の結成や人権侵害に対する抗議を呼びかける秘密ピラを配りました。が、彼らは気狂いか、あるいは警察に操られた挑発者と見なされました。私の度重なる失職も同僚たちの多くにとっては彼らの現状認識の現実性を確認するものでした。いづれにせよ何も変わらない以上何をやっても無駄である——こう確信されていました。それにもかかわらず1980年8月、ストライキが成功しました。最も大胆な夢が現実となったのです。

独立自治労働組合「連帯」その他無数の新しい社会的、政治的諸組織がポーランドに対するわれわれすべての認識を変えました。隠れていた社会的プロセスが前面に登場しました。このひと突きが政府当局者さえをもひとつの単純な事実と直面させました。現実を無視し、これをドグマに従属させ、客観的な経済法則を無視すれば破滅的危機

が不可避である、と。社会の願望を考慮しない支配は明らかに不可能となりました。造船所のストと「連帯」の登場以降、誰もが変化のための社会的事業に参加し、自由選挙の意味と伝説となった民主主義の実際の働きを自分の目で確かめることができました。何百万という人間があらためて市民となったのです。諸事件のおかげでわれわれすべてが、政府当局者だけでなくわれわれ1人1人が国の将来に対し、その経済と政治に対し責任を持っていることを理解しました。

グダンスクで始まった諸事件はヨーロッパの人口3600万の国が抱える問題の真の大きさを全世界に示しました。現実主義の基礎が経済と政治の現実に対する客観的認識にあるとすれば、「連帯」の登場によって現実主義は確実に強化されたのです。虚構が現実の前に姿を消した最も明白な例はコミュニケーションの分野でした。人々はお役所が強制した考えではなく、自分が本当に考えていること、現に不安に思っていることを人前ではつきりと語り始めました。体制の主たる支えであった「新語法」[当局による世論操作のための欺瞞的表現の宣伝語。G・オーウェルの造語]は機能しなくなりました。イデオロギー主義者やプロパガンダ担当者、検閲官などの非現実的世界を表現するにすぎないことがわかったからです。世界を描写し説明するこのオーウェル流を長年経験してこなかった者には、真実を語る簡素な言葉の持つ美しさと効果はあるいは理解できないかもしれません。人民だけでなく当局者たちもまた自らが直面する問題の巨大さに気付き始めました。支配者集団が変わり、統治の、人民との交わり方のスタイルが多くの点で変化しました。12月13日まで、多くの緊張と解決不可能な問題の存在にもかかわらず、対話は続けました。短期間ではあったが多くの可能性を秘めていたわが国歴史のこの1時期について、今はまだ適当な評価を下すにはあまりにも早すぎるでしょう。

戒厳令の施行は今日のポーランドにおける進歩の可能性の限界をあからさまに見せつけました。「連帯」は非合法化され、何千人が拘留、投獄され、拘禁者の多くが今なお裁判を待っています。何千人という仲間が劇的事件の毎日の中で暮らしています。

社会的対立が力の行使によって解決をはかられ、

対話がいきなり中断されるような条件の下で、いったいわれわれはどんな希望が持てるのでしょうか。何をあてにし、何を慰めとすればよいのでしょうか。想像力に最も直接的に訴えるがゆえにマスメディアによって好まれる目を見はるばかりの抗議行動について、世界は多くを聞かされています。拘留、獄舎、鉄格子の中の生活は安らかな眠りを許さない痛ましいニュースです。デモや行進をZOMOの部隊が手荒く蹴散らす光景は押さえがたい深い感情を呼び起こします。悲劇、死、その他恐るべきできごととはすべて、つねに、新しいものの誕生よりも強い衝撃を与えます。しかしわが国の状況はこうした観点からのみ見られてはなりません。

1981年12月13日、戦車が街頭に現われた時、多くの人たちがこう言いました。これは起こるべくして起こったのだ、当局はずっと前から準備を進めていた、と。しかし、これですべてが終りだと考えた人はほとんどいませんでした。改革は、戒厳令によって中断されたとはいえ、永久に葬り去られたものではありません。人間相互の関係の中で、また制度と人間の関係の中で現在進行中の変化は、法令による、新法の制定や旧法の廃止による影響はあまり受けず、法的規範の順守の是非を律する新しい種類の意識によって決定されるのです。法体系はほとんど昔のままですが、これに対する人間の態度は大きく変化しました。つい最近まで、同じ部屋で働く人たちがお互いに相手を恐れていました。今日彼らはともに「連帯」地下組織を作っています。かつては無関心だった彼らが、今日、われわれの組合が定めた理念に従って、勇気を示さずさやかな行動を毎日実行しています。彼らもはや戒厳当局の命令には従わず、改革の道の再開につながるあらゆるイニシアティブに参加します。このような人たちがいたるところにいます。あらゆる工場、製鉄所、鉱山、そして検察庁や裁判所、警察署、治安部隊の中にさえ。拘留された友人たちの多くが、係官によるいやがらせや侮辱だけでなく、彼らの親切と連帯を示す多くの行動を経験しています。こうした人たち、そして彼らの何千というちよっとした行為が——おそらく何よりもそれが——いわゆる歴史的過程を形成するのです。暴力が世界のあの部分を支配する教義の不可欠の一部であることをよく知っている私は、

なおさらのことこのような積極的な態度の重要性がよくわかります。グダンスク造船所のストライキに続くあの熱狂的な16ヵ月間に蓄積された最大の資本がまさにこの新しい意識なのです。この意識こそが私の大いなる希望です。それは現実の客観的な一部にほかなりません。われわれに体制を転覆する必要がないのもこのためです。体制は国民の意識よりも弱く、その圧力の前に後退し、あるいはその影響を受けます。この過程は今も続いており、私が楽観的なのもまさにこのためにほかなりません。

私はほとんど毎日のようにあなた方の国の未知の友人たちから善意と支持の言葉を添えた手紙や葉書を受け取ります。このような連帯もまたきわめて異例の現象です。私はたびたび自問します。まったく異なった政治的、社会的体制の下に住む人々、ポーランドと米国のように互いにこんなにも遠く隔った人々たちが何かを共有できるものだろうか、と。グダンスクの造船所労働者とハーバードのアカデミーの世界との間に何のつながりがあるのでしょうか。こうした問題に数語で答えることは難しい。両国民の間の相互的共感、これはしばしばまたとない研究の対象、それもごく最近の時代にまで言及する研究の対象となります。もちろん、われわれいずれの国民の心にも近い偉大な歴史的人物はいます。しかし私の考えでは、現実の感情的親近感はいわゆる共有するいくつかの根本的な諸価値に基くものです。それを見出すのにそれほど遠くまで行く必要はありません。聖書をひもとくだけで十分です。

人権侵害は、それがどこで生じようとも、全世界の人類に対する侮辱です。われわれポーランド人が、他人を擁護して声を上げる勇気ある知識人や政治家を大きく評価するのにもまさにこのためです。狭量な孤立主義は結局のところつねに、あらゆる代償を払っても自らの平和を維持しようとする者に反感を抱かせます。「連帯」はまさにこの名称そのものによって兄弟愛と相互扶助の理念を呼びさします。労働者たちは、工具を置いて改革の過程に着手した時、マルクス＝レーニン主義の古典に訴えはしませんでした。彼らは、人類がその誕生の瞬間から授けられ、その常識となっている最も原初的な自然法に訴えました。労働者た

ちに国の真の経済状況について質問を寄せたのは、教条主義者が説くように理性を欠いた階級的本能などではありませんでした。それは、政治的洗脳の猛攻に対して彼らが辛うじて守り通した単純な常識だったのです。彼らに知識人たちとともに単一の労働組合を結成させたのは、階級意識ではなく、独立した自治組織がなければ自分たちは1人1人孤立させられ、恣いままに搾取されるという鋭い洞察でした。同時にわれわれは、われわれの民族的伝統に深く根ざしている寛容の精神に今も忠実であり続けています。「連帯」は全体主義的組織にはなりません。それはつねに異なった信念の人々に対して開かれています。それは、個々人の経歴をあらったり、その民族的、社会的背景、あるいは宗教などを問うたりはしませんでした。ここにポーランドのわれわれと米国のみなさんに共通する理念のいくつかがあります。

同じようにして、われわれ両国の何百万という人々は平和に対する献身を共有しています。私の国は平和や安定した国境、国内民主主義の恩恵に浴すにはあまりにも深く病んでいます。われわれは軍拡競争や超大国間の関係悪化、そして冷戦の行方を不安のうちに見守っています。このような針路がわが国の将来に対して、おそらく他のどの国以上に悪い影響を及ぼすだろうことは疑いを容れません。それぞれの国の将来のためにも世界の将来のためにも合意を追求する以外に途はありません。対話の理想を育てるべく創設された国際諸組織は、軍拡競争や1国による他国の支配、基本的な人権の侵害に対してしばしば無力です。こうした状況は政治家たちに対し、国際的理解のための新しい形態を発見するという重大な責務を課します。現代世界は相互に結びついた複雑なシステムであり、いかなる爆発的状況も万人を危険にさらします。わが国の公式プロパガンダは戒厳令の施行を正当化しようとしてしばしば「連帯」を世界戦争さえもたらしかねない平和に対する脅威であるとします。これは明らかに真実ではありません。戒厳令が施行されてやがて18ヵ月になりますが、ポーランドにおける紛争の根源はいまだ取り除かれていません。本当にすべてが順調であると確信できるポーランド人がいるのでしょうか。わが組合はもっぱら平和的な闘争形態のみを使います。政府当局と人民の間の関係をより人間的なものとし、

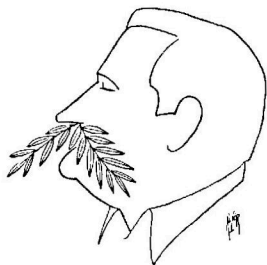
労働者を生産過程の中の単なる1個の歯車から自分の工場の主人とするために、1個の石を投げる必要もなく、1枚のガラスを破る必要もないことは、われわれが身をもって証明してきたとおりです。

われわれはたとえ暴力に直面してもこの平和的行動様式を放棄するつもりはありません。同時にわれわれは、われわれの理想、独立労働組合の権利をはじめわれわれの基本的諸権利を放棄するつもりもありません。ヨーロッパの中央の何百万という人々の願いを無視して平和はありません。

最後に、この偉大な名誉を私に授けて下さったことに対し、令名高きハーバード大学の学長と理事会に対し改めて感謝の念を表明したいと考えます。私はこれを、単に私の個人的業績に対する承認の印としてでなく、何百万というわが同胞がなし遂げた事業に対する名誉ある評価の証明として受け入れたいと思います。私はこれを誇りとしません。もっとふさわしい条件の下で米国を訪問し、私と私の同胞にとってかけがえのない大切な友情と連帯を示して下さった皆さん方とすべての米国人に感謝できる機会がくることを希望します。

グダンスク 1983年5月29日

レフ・ワレサ



ワレサ委員長にノーベル平和賞

「連帯」在外調整局 「国際的支援のシンボル」

1983年度ノーベル平和賞がレフ・ワレサに授与される。独立自治労働組合「連帯」在外調整局はこの授賞を、労働組合と人権を求めて軍事独裁下にもかかわらず不屈の平和的闘いを続ける独立自治労働組合「連帯」全体に対する明確な承認の表現と考える。基本的諸権利を求める東ヨーロッパ諸国民の闘いが世界平和に対する脅威を生み出すものではなく、逆にこの平和のための前提条件を作り出すものである——平和賞はこの確信の反映である。それはまた、ポーランド政府が「連帯」指導者とその顧問たちという形で組合の全体を裁判にかけようとしている今日にあって、国際的支援のシンボルでもある。われわれにとってそれは、ポーランド人が孤立していないことの証拠である。

1983年10月15日

独立自治労働組合「連帯」在外調整委員会
[News of Solidarność, No. 9, 15 Oct. 1983]

Z・ブヤク 「ワレサのヒューマニズム」

10月7日付の声明で、マゾフシェ地区代表「連帯」暫定調整委員会メンバー、ズビグニェフ・ブヤクは、レフ・ワレサに授与されたノーベル平和賞について次のように述べた。平和賞は「投獄された者、裁判を待っている者のため、抑圧され迫害されている者のため、「連帯」の無名の何千という人々のため」のものである。しかし何よりも「平和賞はワレサ自身のためのものである。彼の偉大なヒューマニズムとポーランドの労働界の指導者としての彼の役割を讃えるための」。ブヤクはさらにこう付け加えた。「全世界においてこんなにも多くの人々が、人間を物としか考えない者に対する恐れの中で苦悩し、生きている今日、ノーベル平和賞委員会の今回の決定はとりわけ重要である」。[同上]

アンジェイ・ワイダ (電話に答えて)

「私はとても喜んでいる。距離は離れているけれど——彼はグダンスクにいて私はワルシャワだからね——彼を抱きしめたい。言葉でどう表わしたらいいか……。ノーベル賞委員会がとうとう彼

に賞を与えると決定したことに、私は大いなる喜びを表明するよ。」

ロマン・ボランスキ [映画監督]

「このノーベル平和賞は1年遅かった。1年前なら受賞は大きな象徴的意味を持っただろう。今日ではその意味は小さくなっている。あなた、去年平和賞をもらったのが誰だったか覚えてます?」——このノーベル平和賞は「連帯」を強くするとお思いですか?

「ポーランド人の意気を高めるのは確かだ。人々はこのうらみげましを必要としている。歴史的にね。ポーランド人法王の選出や彼の故国訪問も同じように人々を力づけた。」

——あなたは個人的にワレサ氏をご存知ですか?

「いや、一度も会ったことはない」

[Hebdomadair SOLIDARNOŚĆ Paris No. 27
10 Oct. 1983]

ポーランド政府 「冒険主義に対する報酬」

ノーベル平和賞は、それにふさわしい人物に授与されたこともあったとはいえ、平和という概念の特異な解釈を要するケースも稀ではなかった。「本年の受賞者、レフ・ワレサはこの賞に最もふさわしくない人物である」。……ノルウェーの選考委員会は「ポーランドには混乱が少なすぎ、ワレサ自身と地下過激派の破壊的活動があまりに急速に排除されてしまい、元「連帯」委員長の影があまりに早く薄くなり、彼がブルジョア新聞に与えた約束が社会の関心をひかなくなっている、と結論したにちがいない」……。

「……したがってワレサに対するノーベル平和賞は、最近ポーランドその他の社会主義国に仕掛けられている激烈な政治的宣伝戦におけるいまひとつの反ポーランド、反社会主義の攻撃であるといつて間違いない」。

「平和賞は、ヨーロッパ大陸の安定化を脅かす政治的冒険主義と無責任な行動に対する報酬なのか? 残念ながら答はイエスである」。

[Press Release, Embassy of PPR, Oct. 12, 1983
より抄訳]

「連帯」暫定調整委員会文書(1983年9月18日)

コミュニケ

1983年9月18日、独立自治労働組合「連帯」暫定調整委員会(TKK)の会議が開かれ、ここでポーランドの情勢が分析され、チリの労働組合およびAFL・CIO宛て書簡が起草され、さまざまな組織の問題が検討され、そしてTKKメンバーはすべて本名を名乗るという原則が確認された。ただし下シロンスク地方委員会議長だけは、今なお公然活動に従事しているため、例外的に匿名でTKKの任務に従事することが認められた。彼本人と協議したうえ、TKKに対する下シロンスク地域の公式代表はエウゲニウシ・シュメイコとすることが決定された。会議は次の二つの宣言を採択した。

国会および地方議会選挙の問題について

ポーランド人民共和国始まって以来の深刻な危機の中で、また経済的停滞が続き社会がますます貧窮化する中で、国会選挙の日が近づこうとしている。一方、地方議会の選挙はもう3年間も引き延ばされている。

社会的委任を受けない権力の40年近くにわたる行使は、全体主義体制を危うくし、国の経済をマヒさせてきた。今日、社会の支持を得、国民の死活的利益に奉仕する権力のみが、祖国をその危機から救い出さうことは何の疑いも容れない。

ポーランドが危機を脱出するための条件は、候補者の選定と権力の行使に対し国民の真の影響力を保証する選挙制度に基いて、国会と地方議会の選挙を実施することである。このような選挙制度が準備されているという徴候は何もない。これは、権力者集団が自らの社会的、政治的な全面的孤立を自覚している証拠である。

独立自治労働組合「連帯」および暫定調整委員会メンバーのテレビ出演の問題に関する宣言

労働組合活動家の公式マスメディアへの登場は、それが完全な任意に基くものであれ治安警察(SB)による逮捕のあとであれ、すべて断罪されなければならない。とりわけ、企業組織や地域組織、全国組織で指導的役割を担ってきた個人の場合がそうである。自らに課した任務と責任は、組合の公然活動のための条件が回復されなかり、地下から出る可能性をすべて排除している。まさに彼らに対してこそ、彼らが直面する状況がいかに困難なものであれ、彼らが自らの尊厳を維持し、自らの行動と発言に対して責任を持つことが要求されているのである。彼らは他人に対する模範であり、いつまでもそうでなければならない。

ヴワディスワフ・ハルデクの警察による逮捕後の行動、すなわち自首という道化芝居の受け入れ、テレビ放送への登場、そして公式報道機関を通じてTKKに投げつけた誹謗は、いかなる正当化の余地もない。

わが組合の投獄された活動家たちのあれほど多くが勝者としてくぐり抜けてきたあの試練に、彼は耐えられなかった。勝者の中には逮捕されたTKKメンバーのすべてが含まれている。ヴワディスワフ・フラシニェク、ピオトル・ベドナシ、ユゼフ・ビニオル、ヤヌシ・パウビツキ。ハルデクは自らの活動をすべて否定することにより、この活動が彼に与えてきた信用をすべて失った。治安警察の手中にあってその「連帯」に対する闘いの道具たり続けることをやめるために、監獄でさえも人間から奪い取ることでできない内面の自由を回復するために、ヴワディスワフ・ハルデクは、内務省の諸機関が彼に対して繰り返し加え、これか

らも加え続けるであろう圧力と脅迫に耐える十分な力を自分自身の内に見出さなければならない。

1983年9月18日

独立自治労働組合「連帯」暫定調整委員会
ズビグニェフ・ブヤク（マゾフシュ）

タデウシ・イエディナク（上シロンスク）
ボグダン・リス（グダンスク）
エウゲニウシ・シュメイコ（下シロンスク）

[Solidarność, Bulletin d' Information,
No72, 28.9.83]

チリの労働者と労働組合に対する公開書簡

チリの兄弟たち。基本的な人権と市民権をめざすあなたがたの闘いに対し、ポーランドの労働運動を代表して敬意と連帯の意を表明します。全体主義体制と独裁政府は、それがいかなる形態であれ、自ら自身の社会を恐れ、労働者の組織を怖がります。それが国民から権利を奪うのも、国民を怖れているからに他なりません。しかし、絶対的権力の行使をめざす全体主義の願望は不可避的にその失墜をもたらします。それもそんなに遅くのことではありません。なぜなら、国民の意志とその明らかな利益に逆らっては統治は不可能だからです。ポーランド人は40年にわたる独裁体制を経てこのことを深く確信しています。公正な社会体制に至る道は民主主義の諸原則の実現という道をたどり、また自由な労働組合活動を展開する権利や、人間としての諸権利、そして個々人の自由がなければ民主主義もない、とわれわれは考えます。

われわれがあなたがたの闘いを支持するのにもまさにこのために他なりません。実力によって蹴散らされるデモや、守る術を持たない民衆に対して向けられる銃火が何を想起させるか、われわれはよく知っています。監獄を満たしている者が誰であり、このような状況の下で民主主義の諸原則を

宣言する勇気がいかにばかりの価値を有するかも、われわれの知るところです。しかもそれは、あなたがたが服従を拒否し、代償を引き受ける決意をしたからにほかなりません。

あなたがたの勝利は世界にはびこる悪にくびきをかけます。それは人権の大義をめざすすべての人びとの勝利です。

同時にわれわれはわれわれ自身の勝利、「連帯」の勝利をも確信します。全世界で社会的不正に抗して闘っている人々、自らの尊厳と主権を足蹴にされるにまかせないあらゆる人々、そして自らの基本権が奪われるのを許容しない社会、こうしたものによってわれわれの確信は強化されます。この確信とよりよき未来に対する希望をあなたがたと分かち合いたい。あなたがたが早速に決定的勝利を収められんことを心の底から期待します。

1983年9月18日

独立自治労働組合「連帯」暫定調整委員会
を代表して
ボグダン・リス

[Solidarność, Bulletin d' Information,
No73, 5. 10. 83]

ヨーロッパ安全保障協力会議 マドリード最終文書に関する声明

ヨーロッパ安全保障協力会議の参加国代表は3年近くにもわたる交渉のちマドリード最終文書を正式に採択した。この文書は国際的平和共存の基礎として広く受け入れられている一連の合意や条約に重要な貢献をなすものである。このマドリード

文書は、労働組合や人権、情報、人間の交流、集団（ただし政府を除く）によるテロリズム、国際的安全保障、経済、教育および文化などに関していくつかの新しい条項を追加し、ヘルシンキ最終条約の範囲を拡大している。われわれはいかに限

られたものであれこのような変化を歓迎する。なぜなら、それは全体主義体制の下に生きる何百万という人々にとり重要な意味をもつと考えるからである。そこでは人権や基本的な自由、個人人の身の安全は、法体系あるいは政府が日常的に順守を義務付けられた方法によっては保証されていない。「連帯」を生み出した1980年8月のグダンスク協定をめぐる交渉の過程で、ストライキ労働者がヘルシンキ最終条約に言及したことをポーランド人は今でも覚えている。グダンスク協定は、当時自由労働組合もストライキ権も認めていなかったポーランドの法体系を変える先例となった。東ヨーロッパおよび全世界の抑圧された諸国民にとって、自由労働組合やその他の平和的な独立組織の設立をめざして闘うすべての人々にとって、マドリード文書はヘルシンキ条約ただそれだけよりもずっと強固な支えを与えるものである。

東ヨーロッパ諸国に対しマドリード最終文書の受け入れを強制した要素のひとつは、マドリードにおける交渉過程での西側および中立諸国の断固たる態度であったとわれわれは考える。同時にわれわれは、文書に含まれる諸条項の実行を保証するために、等しく精力的かつ効果的な措置がとられるものと確信している。諸国民——単に政府だけではなく——間の公正かつ平和な協力の維持は

そのような措置の助けを借りてのみ実現できる。さらに、会議に参加した民主主義諸国は、マドリード最終文書に署名することにより、他の参加諸国に対してこの文書の順守を求め、これら諸国がそれぞれの国内における人権侵害のくわくめいとしてこの文書を利用することを許さない、そういう義務を自ら引き受けたのである。

忘れられてはならないのは、ポーランド政府も批准しているとはいえ、ヘルシンキ条約も他のいかなる国際協定も、ポーランド政府がその国際的義務にあからさまに違反して、ポーランド国民の基本的諸権利を乱暴に切りつめ、「連帯」労働組合を非合法化するのを、何ら妨げなかったという事実である。ポーランド政府はマドリード最終文書に調印したが、現時点においてその諸規定を順守しておらず、将来において順守するつもりのある徴候をいささかも示していない。この広く知られた事実に対し、マドリード文書調印国のすべてが全面的に責任を負うべきである。

1983年8月26日

独立自治労働組合「連帯」在外調整局

イェジ・ミレフスキ

[Uncensored Poland News Bulletin No.18/83,
16 Sept.1983]

イギリス労働総同盟に対する 「連帯」暫定調整委員会の挨拶

ポーランドの働く人々を代表してイギリス労働総同盟の大会に心からの挨拶を送ります。……

ポーランドの勤労人民は権利を求めるその闘いに新しい次の局面を迎えています。1956年、70年、80年、そして「連帯」の合法時代の経験とこれまでの闘いで鍛えられたわれわれは、権利をめざすこの闘いを決して放棄しません。社会の断固たる態度にもかかわらず、この闘いの終りはまだ遠い。それだけに一層、「連帯」に対する支持のあらゆる現れにわれわれは深く感謝します。

イギリス労働総同盟は本年5月、ポーランドの官製労組といかなる関係ももたないことを宣言しました。……これはポーランドにおける抵抗戦線を強化します。この苦難の時にあたりポーランド人民は、エセ組合が国内のみならず国際的にも

イコットされるべきこと、国際的連帯が現に存在することを必要としています。このゆえにわれわれの闘いに対する道義的支持はこの上もなく大きな意味を持っています。社会

直面する数多くの問題にもかかわらず、われわれは……とりわけ合法時代以来の友好的労働組合との密接な関係の維持を望んでいます。経験豊かで伝統の長いイギリス労働総同盟との協力はとくに重要です。ポーランドの勤労人民はイギリスの仲間にVサインの挨拶を送ります。わが国ではこれだけでも罰せられるのです。

1983年9月5日 ボグダン・リス

[Uncensored Poland News Bulletin, No.18/83,
16 Sept. 1983]

ポーランド日誌

1983年8月6日～9月30日

8月6日 8月1日からポーランドを訪問していたL・ザミヤチンを代表とするソ連党代表団が帰国。PAPによればソ連—ポーランド両党のイデオロギー、プロバガンダ、情報活動の経験の交換がなされたという。

8月8日 政府によると83年上半期の工業生産は対前年比8.2パーセント増大したという。ブリュッセルに本部をおく国際自由労連が全加盟組織に対し、「『連帯』に連帯する適切な行動」を呼びかける。

8月10日 8月8日からポーランドを訪問していた米上院外交委代表団のC・グッド上院議員は政府—党関係者との会談をおえて帰国するに当たり、米国の経済制裁を解除するのは時期尚早であると語る。この日ワルシャワの地下「連帯」指導部は8月31日に公共交通機関のボイコットを呼びかける。

8月13日 グダンスクの聖ブリギッタ教会のミサにワレサを始め数千人が集まる。ワルシャワから来た神父が戒厳令「解除」を非難する発言を行う。

8月14日 チェンストホヴァの聖母被昇天祭に30万人が集まる。会場には「連帯」旗が掲げられ巡礼者の多くの胸に「連帯」バッジが。グダンスク造船所の「連帯」地下委員会が当局に対しワレサと交渉するよう要求し、要求をのまなければ23日から8月末まで全国で作業のスローダウン闘争を行うと通告する。グダンスク市内の教会で3年前の造船所労働者のストライキを記念する礼拝が行われ、数千人が70年事件記念碑まで行進するが機動隊に解散させられる。

8月15日 グダンスクの70年事件記念碑前で約600人がデモ。ワレサが短い演説をする。ラコフスキ副首相は、「ワレサとの会見は問題にもならない」と述べる。

8月16日 グダンスク県知事、9月15日まで不法集会などの違法行為を取り締まるに当たり、即決手続きをとることを指示。

8月17日 「連帯」マゾフシェ地区のZ・バヤクは、スローダウン闘争を呼びかけたグダンスク労働者を支持するよう全ポーランド人に訴える。公式報道機関がワレサ批判を再開。

8月18日 ワルシャワのF S O乗用車工場で300人の労働者がスト。8月16日から訪問していたホーネッカー東独議長が帰国。ソ連東欧圏の首脳が戒厳令解除後の

ポーランドを訪問したのはこれが初めて。

8月19日 ワルシャワ市長命令によりポーランド作家組合(ZLP)が解散させられる。ワレサはフランス・テレビとのインタビューで、当局の挑発さえなければ8月31日に街頭衝突はおきないだろうと語る。

8月21日 公式政治週刊誌『ポリティカ』は前グダンスク県知事でグダンスク協定署名者の1人イェジ・コウォジェイスキとのインタビューを掲載。「いずれの側も心理的、政治的に協定を実行する準備がなかった。当局側は、過去の経験に基いてこのような協定を破っても受け入れることはない」と確信していた。……「連帯」はポーランドの政治情勢の本質を理解できなかったため最終的に敗北した。

8月22日 T K K（「連帯」暫定調整委員会）、グダンスク協定3周年をひかえて声明を発表（本誌前号27頁参照）。グダンスク造船所の外に約1000人の労働者が集まり短いデモ。

8月23日 T K Kメンバーの1人でマウオポルスカ地方の指導者ヴワディスワフ・ハルデクが国営テレビに登場し、「22日に投降を決意した。地下活動は社会に不必要な分裂をもたらす」と述べる。テレビのハルデクは明らかに病気で、声明を読みあげている間1度もカメラの方を見なかったという（本誌前号25頁参照）。

8月25日 ラコフスキ副首相、グダンスクでワレサを含む労働者と会談。

8月26日 ポーランド司教会議は「法王の訪問によって作られた真の国民的和解の機会が生かされなかったのは残念である。……真の対話と組合複数制度と全面的恩赦を期待する」と訴える。この日ワレサは声明を発表し、「当局には国民の意見を考慮する意思が全くない。政府は国民の全面的服従を要求している。労働者は自らの権利と『連帯』の復権をめざして闘うべきである」と訴える。カトヴィツェで開かれた全国新労組活動者会議でヤルゼルスキが演説し、規律と自覚の必要性を強調。

8月27日 ワルシャワ放送が8月25日のラコフスキ副首相との会談におけるワレサの発言を10分間だけ流す。ワレサの発言が放送されたのは戒厳令施行以来初めて。

8月28日 ワルシャワの聖アンナ教会の花の十字架の周りに約1000人の「連帯」支持者が集まる。

8月29日 国家計画委員会によれば、延期されていた1000件の投資計画のうち、520件は完全に放棄され、440件は85年以降に回される。これによる損害は約10億ズウォティにあたるという。

8月30日 政府スポークスマンのウルバンによれば、「W・ハルデクは8月22日に自由意志で自首してきた

ものであり、8月22日のTKK声明に署名したというのはウソである」という。ボグダン・リスがグダンスクのラジオ「連帯」を通じて明日の抗議行動への参加を呼びかける。

8月31日 グダンスク協定3周年記念日のこの日、公式報道機関によれば、グダンスク、ワルシャワ、ノヴァフタ、クラクフ、ヴロツワフ、ルビン、チェンストホヴァ、ポズナンその他何か所かで労働者のデモがあったという。西側の報道によれば2時間の交通機関ボイコットは完全ではないにしてもかなり成功したもよう。

9月1日 ワレサ、8月31日の行動は大成功だったと語る。軍機関紙「ジョウニェシ・ヴォルノシチ」は、8月31日の行動について「平和を乱す試みは再度失敗し、地下グループの孤立が深まった」と述べる。

9月2日 統一労働者党政政治局会議が開かれ、8月31日について「西側反共センターに支持された死にもの狂いの努力にもかかわらず、地下グループとその同盟者はわずかの例外を除いて社会の広い反応を得るのに失敗した」と総括。

9月3日 クラクフの党委員会、ノヴァフタのレーニン製鉄所の情勢について検討し、ここでくり返し生じる混乱の原因は単に反対派の活動だけでなく、「多数の未解決の社会的問題」にあると述べる。

9月4日 グレンプ枢機卿、ヤスナグラで10数万の農民の前に「政府がかつてパートナーとして扱った労働者たちを今は拒否し、断罪し、中傷するのは倫理にもとる。ただちに対話を再開すべきだ」と演説。

9月6日 TKKはグダンスク地方代表ボグダン・リスの名前でイギリス労働総同盟の大会にメッセージを送る（本誌25頁参照）。

9月9日 内務相はポーランド作家組合の解散を命じた（8月19日のワルシャワ市長の）決定を再確認。

9月12日 ワレサ、西側ジャーナリストに対し、「政府の経済改革計画は失敗するだろう。そうなれば新たな社会的混乱が不可避である」と語る。

9月13日 ポーランド作家組合の解散に抗議して、同組合員で現在西側にいる25人のポーランド人作家が抗議書簡を発表。署名者には、S・パランチャク、W・バルトシェフスキ、L・コワコフスキ、C・ミウシエ、S・ムロジェクラ。

9月15日 ポーランドの国営テレビがワレサに関する特別番組を放送し、彼に対する中傷キャンペーンを再開。

9月16日 地下新聞CDNによれば、ワレサは「連帯」を地域的組織に分割し、「連帯」の名称を当面放棄す

ることを提案したという。

9月17日 経済改革相W・バカによれば、1983年1～8月の工業生産は8.5パーセント上昇し、輸出は17パーセント、生産性は12パーセントそれぞれ上昇したという。

9月18日 ワレサは「先のCDNの記事は自分の考えを正確に表わしていない。「連帯」の名称の放棄は、「連帯」そのものについてではなく、その地下指導部の将来について言及したものだ」と語る。

9月19日 地下「連帯」ヴィエルコポルスカ（ポズナン）地方議長ヤヌシ・パウビツキの裁判がポズナンで始まる。この日ワルシャワで「ポーランドの憲法と政治制度及び法律を承認する」すべての作家を対象に新しい作家組合の設立委員会が発足。

9月20日 政府スポークスマンのウルバンは外国人記者会見で、旧KORのメンバー4人（J・クーロン、A・ミフニク、H・ヴェツ、Z・ロマシェフスキ）が「ポーランド人民共和国の憲法体制の暴力的転覆と防衛能力の弱体化をめざす準備的行動」の罪でワルシャワ地区軍事法廷に起訴されたと発表。

9月22日 ポーランド司教会議は公共建築物からの十字架の除去に抗議する声明を発表。

9月24日 先に逮捕された元TKKメンバーW・ハルデクが再び国営テレビに登場（本誌23頁のTKK声明を参照）。この日の「トリブナ・ルド」によれば、「新労組は330万人の組合員を数えるに至ったが、その組織化は順調ではなく、抵抗がないわけではない」と述べる。

9月26日 グレンプ枢機卿はマリノフスキ副首相と会見し、教会が資金を出す農業援助資金の設置について

ポーランド研究会定例会のご案内

ポーランド研究会定例会が左記の要領で開催されます。多数の参加を。

日 時：11月20日（日）

午後1時30分～4時30分

場 所：労音会館604号

報告者：小森田秋夫氏（北大助教授）

テーマ：ポーランドの新労組法について

なお、ポーランド研究会に入会を希望される方は年会費2000円を添えて研究会事務局（資料センターと同所）までお申し込み下さい。

意見を交換。教会が援助を個人農に集中することを望んでいるのに対し、政府は資金の一部を農業関連国営工業にも与えることを望んでいるもよう。

9月27日 ウルバンによれば、この数ヶ月に4万2250人の学者を対象に考査（政治的見解ではなくその業績について）が行われ、うち1329人が解職されたという。

9月28日 グダンスクでのレビア・グダンスク対イベントス（イタリア）のサッカー試合中、観客の一部が観戦中のワレサを見つけ、「ソリダルノシチ」、「ワレサ」のシュプレヒコール。ワレサはVサインで応える。競技場当局はスピーカーの音量を最大にして妨害。

9月29日 軍最高検察庁はワルシャワ地区軍事法廷に

対し、旧KORの4人に対する起訴状を提出。ワレサはこの日40歳をむかえ、教会で待ち受けていた群衆の祝福を受ける。この日ポーランド国会で司法相が戒厳令解除に伴う特赦法の実施状況について報告。それによれば、政治犯1138人を含む2565人に特赦が適用され、7月22日現在獄中にあった640人の政治犯のうち557人が釈放された。残る83人は今なお拘禁中でこのうち30人に対しては特赦は適用されないという。

9月30日 ワレサを含む「連帯」幹部70人が裁判を待つ「連帯」指導者7人の釈放を求めて国会に訴える。

〔編：鶴崎公敏；水谷峻〕

編集後記

☆深まる秋、ということで本号はご覧のような文化特集を組みました。戒厳令下の文化、芸術の全体的状況や、そこで生み出された作品なども紹介したかったのですが、時間と紙面の制約で今回は果たせませんでした。今後を期したいと考えます。

☆本センター代表幹事工藤幸雄氏の夫人、工藤久代さんが近著『ワルシャワ猫物語』で第10回日本ノンフィクション賞を受賞されました。会員、読者の皆さんに一読をおすすめすると同時に、夫人に心からお喜び申し上げます。

☆「連帯」のワレサ委員長に1983年度ノーベル平和賞が授与されました。圧倒的多数のポーランド国民がこれを歡呼して迎えたと報じられています。本号でもとりあえず、内外の反応の一部をお伝えします。また本号収録の「ハーバード大学への書

簡」は同委員長の考えを包括的に述べていて時宜を得たものと確信します。

☆中国総工会（労働組合）が全国代表大会で新規約を採択、新華社電によると、労働者のスト権について中国総工会スポークスマンは、中国では労働者が国や企業の主人公であり「ストは支持できない」との基本的立場を示しながらも「新規約がスト権について言及していないことは、すべてのストが違法であることを意味しない」と指摘し、状況次第ではスト権が容認されることもあるとの考えを示したといっています（毎日新聞10月24日朝刊）。ここにポーランド「連帯」の闘いの影響を読みとるべきか、その影響の未だしを嘆くべきか、専門家のご教示を求む。

☆A・ミフニクの「分析と展望——獄中よりの手紙」の続きは、紙面の都合により、次号に掲載します。

1983年10月25日 (み)

初級から文学鑑賞まで
ロシア語とロシア文学コース
講師・江川卓、水野忠夫、桑野隆、鴻英良他
テキストチュエホフ、ドストエフスキー、
マヤコフスキー、プーシキン他
ポーランド語とポーランド文学コース
講師・工藤幸雄、石井哲七朗、米川プランカ
小原雅俊、進藤照光、篠崎誠一他
テキスト入門書から「灰とダイヤモンド」まで



コトバを学ぶ。しかし、コトバだけを学ぶのではない。そのコトバを語りそのコトバを生み出したロシアやポーランドの、民衆や精神風上を学ぶ。コトバのむこう側に目を注ぎ、耳を傾ける場——案内書無料送付

マヤコフスキー学院

東京都中野区東中野 1-41-5
TEL (362) 8771~2

発行所・ポーランド資料センター
Center for Polish Research %Kazukuni Bldg. 3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101

東京都千代田区三崎町2-10 5 一国ビル3F
電話 03-261-2585 郵便振替 東京 2-81069
定価400円・年間定期購読料5000円(送料共)